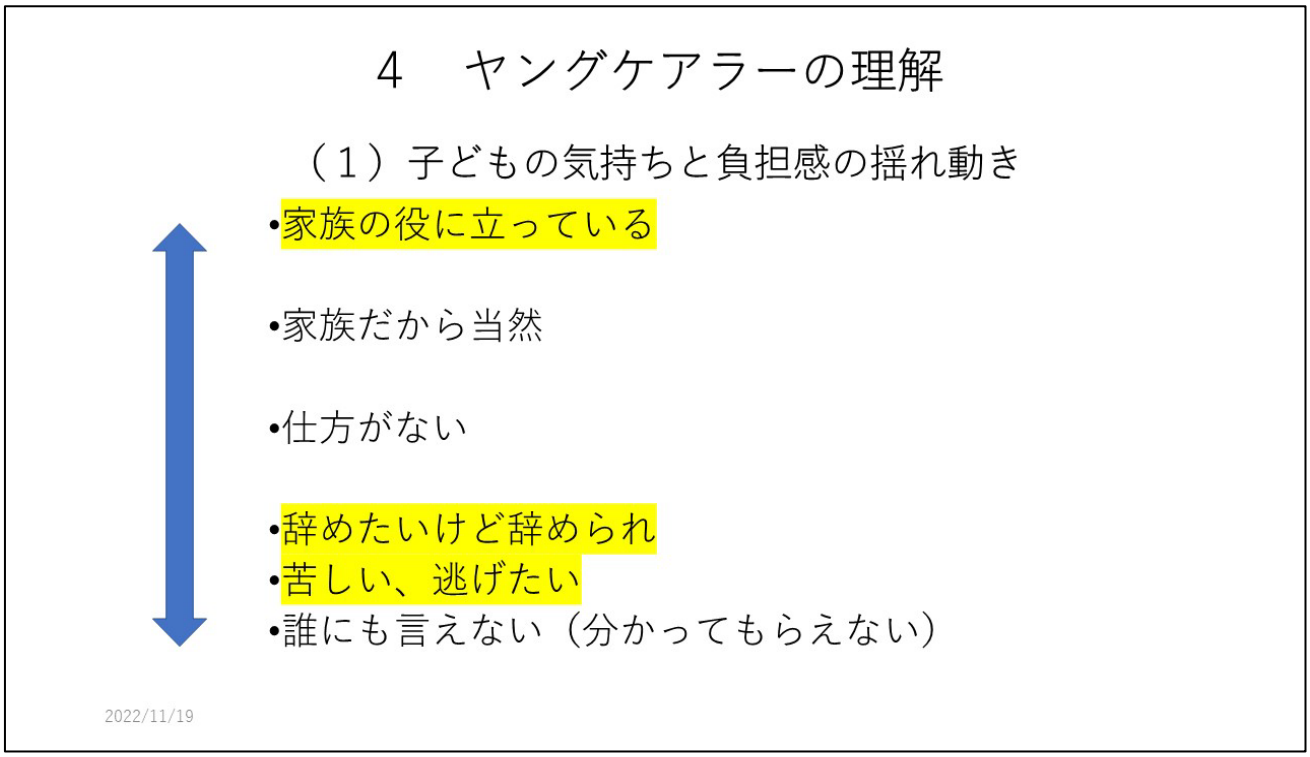
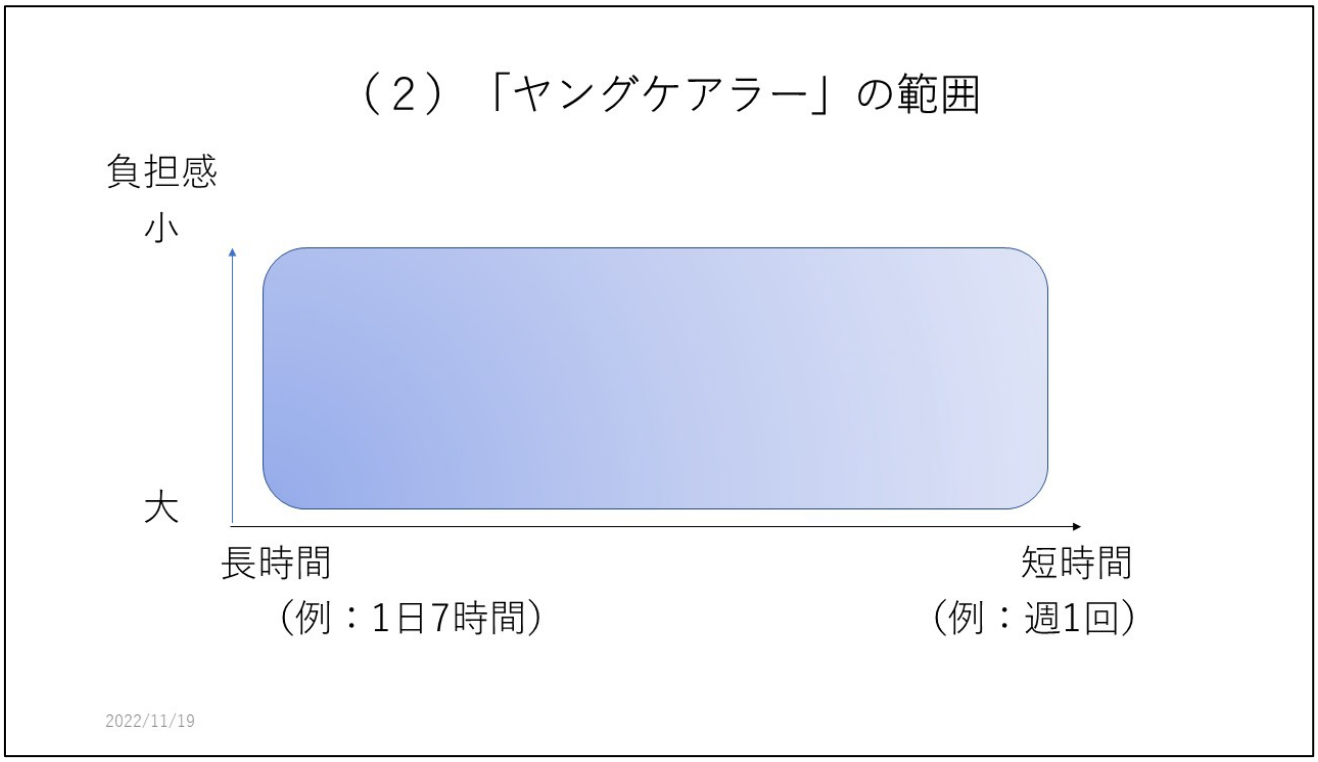


ヤングケアラーは家族のケアをするので、「ありがとう」とか「いつも助かっている」などと言われたりして、家族の役に立っています。

一方で、大人になってから過去を振り返って、「家族だからしょうがない」とか、「家族だから当然」というふうに思っていたりもしますし、「やめたくてもやめられなかった」、「苦しい」、「逃げたい」というふうに思っていることもあって、すごく幅があります。

先ほど行政説明でも説明がありましたが、必要としている支援について「特にない」と回答した子どもたちは、実際にはどんな子どもたちなのか。ケアの時間が短いのか、ケアの回数が少ないのか、それとも「いっぱいケアをしているけれど、別に何も支援はいらない」と思っているのか、その点は分からないのです。



「ヤングケアラーの範囲」についてですが、グラデーションだと思ってください。濃いところから薄いところまであるという感じです。本当にヤングケアラーで、負担感の大きいケアを担っている子もいれば、そこまでの負担はないという子もいたりします。

それで、どこで線を引くか。行政として支援を考えるときにはどこかで線引きをしますけれども、厚生労働省の人に聞くと、「定義は作らない」と言っていました。「定義を作ると、“ここの子は定義に当てはまる、この子は定義に当てはまらない”となって、ケアをしてる子どもたちが弾かれてしまう可能性があるため、国としては定義は作らない。支援が必要な人には幅広く支援が行き届くようにしたい」と言われていました。

ヤングケアラーには色々な形があり、負担の程度もさまざまですから、とても線を引きにくいと思います。

ちょっと話が戻りますが、（42ページの）「学校生活への影響（市町村調査）」のところで、ヤングケアラーの約３割が「学校を休みがち」でした。
学校でアンケートを行うのはとても良いのですが、ヤングケアラーでケアをしっかり担っている子どもたちは、アンケートのときに欠席しているかもしれないとも思いました。

学校調査には、学校の先生にアンケートをとる場合もありますが、ヤングケアラーを発見できないことが多いです。
また、子どもに無記名でアンケートを取ると、誰がヤングケアラーか分かりません。アンケートに名前を書いてもらうと誰か分かりますが、その場合は本当のことを書かないだろうと思います。

山口県は、アンケートを全数調査に近い形でやられていますので、確率が高く、実態をかなり反映していると思いますが、このアンケートから支援に結びつけるのは、ちょっと簡単にはいかないだろうと思います。

（3）社会的孤立

家族のケアニーズの上昇

↓

ヤングケアラーの発生

↓

ヤングケアラーの孤立

社会的要因	家族要因	子どもの心理
・福祉サービスの不足 ・家族のケアが前提の制度 ・周囲の無理解 ・冷ややかな視線 ・周囲の善意による「期待」	・家族の秘密（世間体） ・「家族でみる」という抱え込み ・情報不足 ・家族全員の疲弊 ・家族それぞれの生活や価値観	・「人と違う」意識 ・人に知られる恐怖 ・「普通の学生」 ・「みじめ」な姿 ・自己嫌悪 ・先の見えない不安 ・「自分が我慢すればいい」あきらめ

2022/11/19

そのようなことを考えていくと、ヤングケアラーの孤立という問題に当たります。家族にケアニーズが発生して、ヤングケアラーが発生するけれども、なかなか支援に結びつかないというのが、全国的な問題です。

１つは、社会的な要因で孤立してしまうことです。そもそも福祉サービスが乏しいという要因があります。それから、家族のケアが前提となっていることです。また、周囲の無理解があります。ケアを受ける人に障がいがあったり、外国籍の方だったりすると、周囲の目がとても気になります。逆に「偉いね」などのように言われてケアを期待されているときも、社会的な孤立ですね。

２つ目は家族の要因です。世間体があって、ケアが必要な状況であることを隠そうとするとか、家族から「このことは人に言うな」と言われたりとかです。一方で、「自分が見なければ」、「家族だけで見なければ」という家族での抱え込みがあったりします。
そして、情報不足ですね。色々なサービスや支援があることを知らないで、家族だけで抱え込んでいるということもあるかもしれません。そして、家族の中にもそれぞれに価値観があって、どうしてもケアできる人がケアを担わざるを得ないという状況があります。

３つ目の子どもの心理ですが、友達はみんな親から世話をしてもらって好きに自由に遊んだり、勉強したりして、興味のあることができるんですが、ヤングケアラーは家族のケアをしなければいけないという状況で、「みんなと違う」という意識があったり、人に知られることが恐怖だったりして、普通の学生になりたいと思っているんです。

あるとき、当事者の方に聞いた話では、「できるだけ見つからないようにしたい。普通の生活をしたい。特に学校では普通の子でいたいんだ」と言っていました。理由を聞いたら、「自分が惨めだから」と言うんですね。
その方は、お母さんの世話をされていたんですが、お母さんのことが大好きだったし、昔可愛がってもらったので、今度は自分が世話をしなければいけなくなったことに対して、「したくないと思ったわけではないけれど、そのことを人に知られたくないし、知られると惨めな思いをする」といったことを言っていました。

ヤングケアラーは、「いつまで続くんだろう」という先の見えない不安や、「自分さえ我慢すれば家族が生活していけるんだ」といった色々な気持ちの中で、社会的要因、家庭的な要因、子どもの気持ちの問題などで、どんどん孤立してしまいます。
本当に、ヤングケアラーの発見がなかなか支援に結びついていかないということを思います。

5　ヤングケアラーへの支援
（1）発見・気づき

- ヤングケアラーに気付くには知識が必要
- ヤングケアラーのアセスメントシート（チェックリスト）も発見に役立つ
- 中学生以上では研修や授業等でアンケートを自分でつけることで、「自分がヤングケアラー」であることに気付く場合も

2022/11/19

では、これからは支援の話をしたいと思います。一番は、発見・気づきです。ともかく、気づかないと支援につながらないです。

心配・気になる児童生徒がいたら（身近な大人ができること）

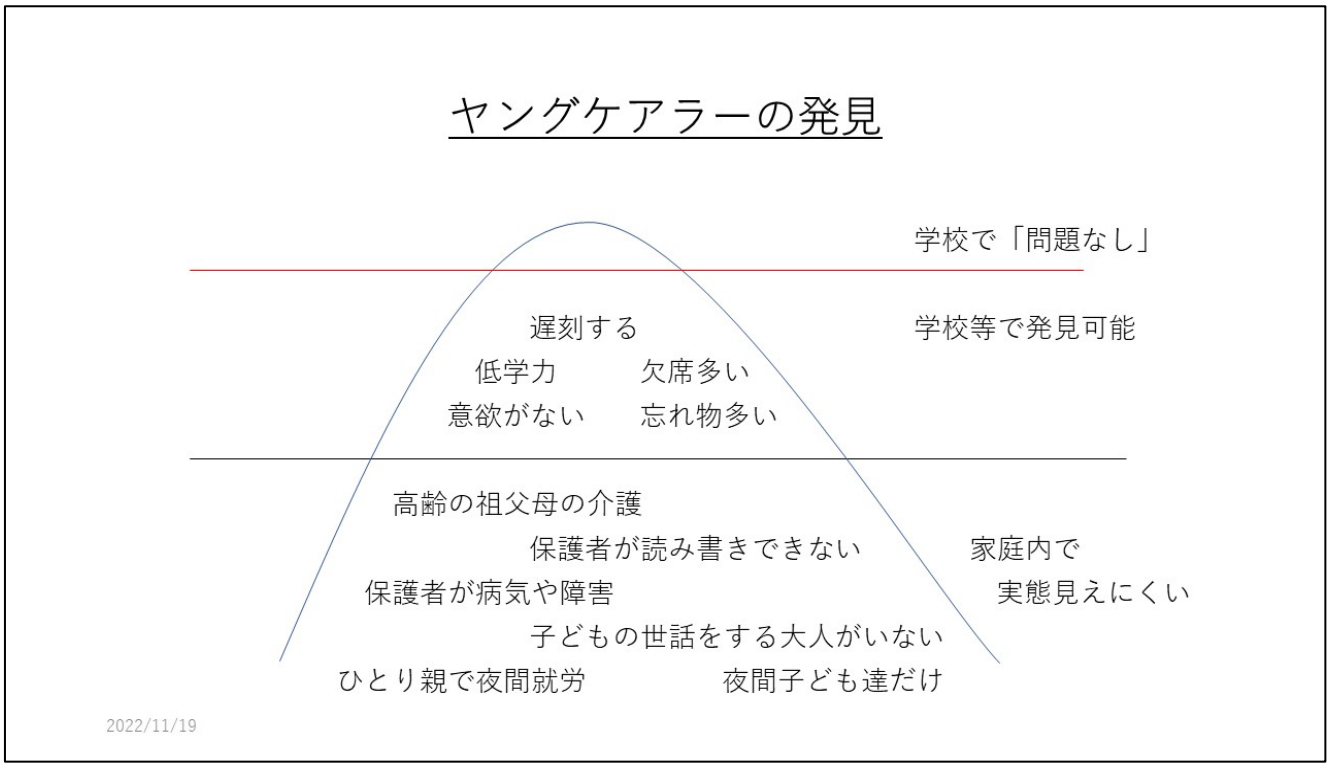
- 「何かあるんじゃないか」との声かけ
- 否定しても「困ったことがあれば話を聞く。一緒に考えるよ」

2022/11/19

ヤングケアラーは、遅刻や宿題忘れなど、学校でいっぱいサインを出しています。
私は、過去に２回、シンポジウムで当事者の方にお話を聞いて、その後もちょっと話をしたのですが、当時はもう20歳を超えていらっしゃった方ですけれども、「学校では友達と普通にしていたい。だからできるだけ隠していた」と言うのです。しかし、聞いていくと、いくつかサインが出ていたなと思います。

そのサインに気づいたとき、声をかけてください。それこそ「家庭の中で何かあるんじゃないの」という言葉でいいと思います。

そして、多くの場合、否定されます。ですが、否定されても、「いや、大丈夫です」とか「いや、問題ないです」とか言われても、「困った時があればなんでも話を聞くよ」、「どうしたらいいか一緒に考えようね」と言ってください。そう言って、「なんか先生が心配してくれている」、「他の人たちが心配してくれている」と感じてくれることがとても大事な気がします。



ヤングケアラーは、学校の中でこういうサインが出ていますが、一番大切な「誰に、何をしているか」ということは、家庭の中のことなので、とても発見しにくいかもしれません。

逆に介護福祉士やヘルパーさんなど、高齢者・障がい者ご本人の支援に関わっている方のほうが、家庭内のところが見えるかもしれません。

（2）アセスメントと家族理解

① 子どもの状態（生活への影響）
② 家族のケアニーズや家庭内で子どもが果たしている役割

両方のアセスメントが必要

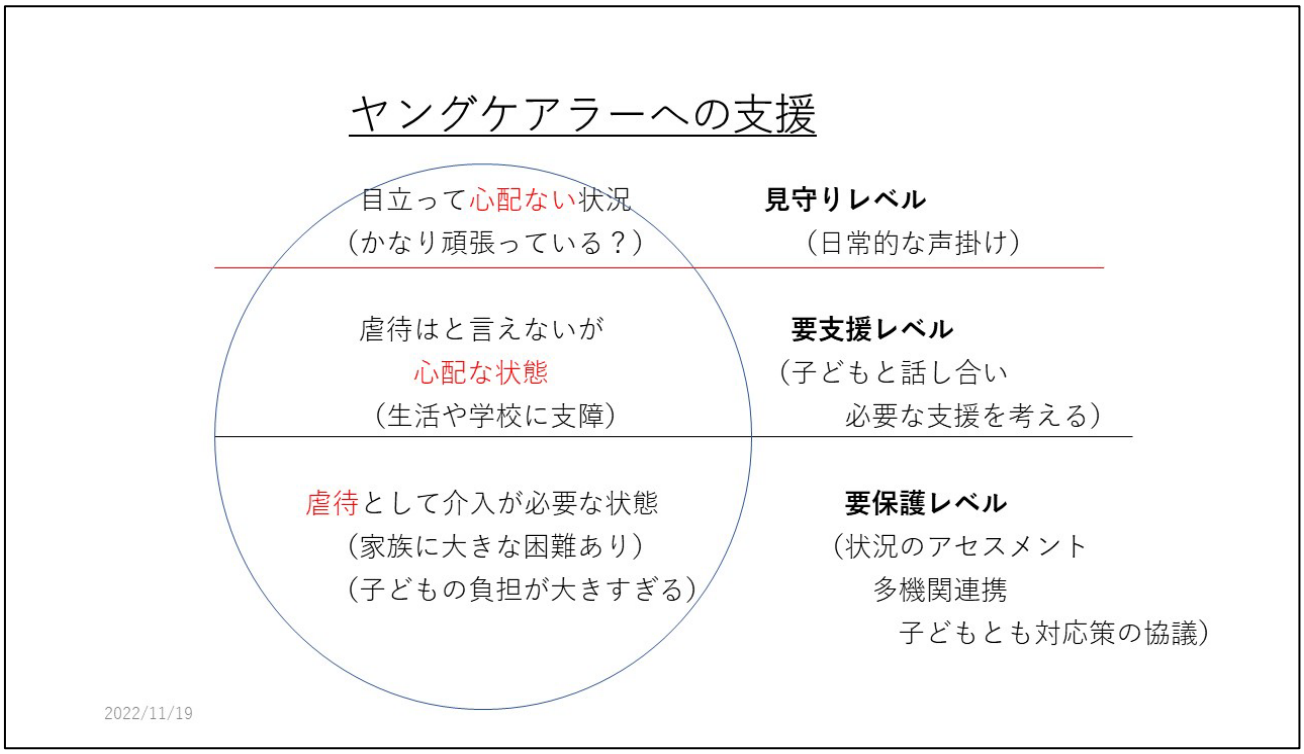
アセスメントの評価は

- 要保護レベル（虐待と判断する）
- 要支援レベル（個別またはネットワークでの支援が必要）
- 配慮レベル（時々声をかけたり情報を提供）

2022/11/19

次に、発見した後、どのようにアセスメント（評価）するかですが、２つあると思います。
１つは子どもの状態。生活にどんなしわ寄せが来ているかということです。そういう意味では、行政説明であった「世話をしているために、やりたいけどできないことがある」ということは、１つの指標になるだろうと思います。

もう１つが、その子どもが何のケアを担っているかという、家族の中での役割です。子どもが担っているケアの部分を解消しないことには、ヤングケアラーは自分の時間が取り戻せないわけです。そのため、どういうケアを担っていて、家庭の中でどんな役割を果たしているかというアセスメントが必要と思います。



ヤングケアラーを発見し、アセスメントをした後の支援ですが、まず上からいくと「見守りレベル」です。時々「大丈夫？」「何かあったら話聞くよ」などと声をかけることでいいと思います。

「要支援レベル」は、虐待や権利侵害とまではいえないかもしれませんが、かなり負担が大きいというところです。

「要保護レベル」は、虐待ともいえるような部分です。この部分にもしっかり支援をしていきたいと思います。

以上、３つのレベルに分けて支援策を考えた方がよいと思います。

（３）配慮レベル

- 学校生活で支障は見えないが、家族のケアニーズを支える一員として家族システムが出来上がっているため、そこから逃れることができない（長期化すれば負担は増加）
- 子どもの役割がなくなっても家族の生活が維持できるようにするための取り組みが必要（例えば、先の「家族応援会議」も）
- 本人の負担が大きすぎないか、本人の不満や意欲は大丈夫か、定期的に教員や支援者が話を聞く必要あり

2022/11/19

具体的な話をしていきます。「見守りレベル（配慮レベル）」ですけれども、学校生活はちゃんとできています。

けれども、大人から見て負担が大きすぎるようであれば、本人の負担が大き過ぎないか、本人の不満や意欲は大丈夫か聞くため、「あなた大丈夫？」という声かけを定期的にした方がいいかなと思います。

ケアの負担が大きければ本人の負担も大きいのでしょうが、ケアの負担が少ないから本人の負担が少ないとか、悩みが少ないかというと、そういうことはありません。ケアの負担が小さくても、それをすることが本人に義務付けられている、そういうシステムになっている場合には、ヤングケアラーとしての支援が必要かと思います。

（４）要支援レベル

- 要保護状態（虐待レベル）ではないが、子どもの学校生活や日常活動に支障をきたしている状態
- 家族のケアニーズや困難を一緒に解決できるように子どもや保護者を含めた「家族応援会議」の開催も
- 子どもの生活上の支障の解消に向けて、子どもと話し合うことが必要
- 学校だけで対応できない課題も多いので、要対協の支援も必要

2022/11/19

要支援レベルです。学校生活にも支障をきたしてくる状況ですが、学校だけでは対応できません。スクールソーシャルワーカーの方や、行政の方など、いろんな方と支援ネットワークを組んでの支援が必要になってきます。

（５）要保護レベルへの支援

- ヤングケアラーでもあるが「被虐待児」との認識が必要
- ネグレクトだけでなく、身体的・心理的虐待を受けている可能性あり
- 子どもの安全確保や権利保障を優先した支援が必要
- 対応策は子どもと協議を（子どもは分離を求めていない）
- 家族の抱えている課題や困難の解決・減少が必要

（注）家族のケアニーズをこれまで支えてきた子どもへの敬意が必要

2022/11/19

虐待として介入が必要な状態である「要保護レベル」です。
ヤングケアラーで、子どもは家族のケアを担い、子どもだけではとても手に負えないような部分までケアしており、なおかつ、それでも家庭生活が十分できていないような状況の場合には、要保護レベルとしての積極的な介入が必要になってきます。

繰り返しますが、怒鳴られたり叩かれたりしているヤングケアラーも、市町村が把握している中で３割ぐらいあるということです。虐待という発想での対応が必要になってくるかなと思います。

（６）ヤングケアラーを支援する際の注意点

■「ヤングケアラー」であることを、子どもや保護者が認識していないことを考慮した対応

■今までケアを担っていることを尊重し、役割を否定しない

■ヤングケアラーであることを公にしてほしくないケースに対する配慮

■子どもに対するメンタル面へのサポートの必要

2022/11/19

ヤングケアラーを支援する際の注意点です。

ヤングケアラーであることを、子ども自身や保護者は自覚していないことも多々あります。

繰り返しますが、アンケートで「支障がある」と答えた子だけがヤングケアラーではありません。本人たちは「大丈夫」、「（世話をするのは）当然だろう」と思っていても、周りから見て「ちょっと酷い状況じゃないか？」という状況なら、もうヤングケアラーと考えた方がいいかなと思います。

もう１つ大事なことは、「ヤングケアラーはかわいそうな子。なんとか助けなければ」というふうに、ぜひ思わないでください。
子どもたちは、悪いことをしたわけでも、無駄な事をしていたわけでもないのです。ヤングケアラーが今までしていた役割はとても大事なんです。家族を大事にすることも大事。とても良いことだと思います。けれど、自分も大事にしてほしいということなんです。「家族も大事、だけど自分も大事にしてね」というメッセージを伝えるべきと思います。

繰り返しますが、今まで悪いことをしたわけでも、無駄なことをしたわけでもなく、それは家族が生活する上で必要だったことなんです。「家族の生活をなんとか維持しよう」、「なんとか、みんながうまくいくようにしよう」と頑張ってきたわけですので、それはぜひ否定しないでいただきたいですし、単なる保護の対象、救済の対象ではないっていうことは、ぜひ自覚していただきたいなと思います。

そして、ヤングケアラー自身は、ヤングケアラーであることを公にしてほしくないんです。先ほども言いましたが、「学校では普通でいたかった」、「友達とは普通でいたかった」と繰り返し言っていました。ヤングケアラーであることを友達に知られたくないという子は多いのだろうと思います。

でも、本当に負担が大きすぎて、心身に支障をきたすような感じになっていくこともありますので、本当に支援が必要であれば、特にメンタル面の支援が大きく必要だと思います。